



オリジナル技法〈絹彩画〉^{きぬさいが}で日本の懐かしい風景を、表現する

2019年春CDA入会の前野節(まえのせつ)です。

《日本の古い街並み、懐かしい風景》を主なモチーフに、「絹彩画きぬさいが」と名付けた独自の技法を用いて創作活動(個展・レッスン・クライアントワーク)をしています。

《絹彩画とは……》

まずその技法をごくごく簡単に紹介させていただきます。

- ・画材は正絹の着物の端切れとスチレンボード(糊付)
- ・下絵をトレースしボードに貼り、下絵のラインに沿ってアートナイフで切目を入れる
- ・その切目に型紙より少し大きく切った絹裂を、オリジナルの金ヘラで押し込む

以上!!

と、3行で説明が終わるとも単純な技法でワークショップでも園児から、80歳超まで幅広い年代の方々に楽しんでいただいています。

さりとして、単純とはいえ時間を端折ることの難しいのもこの技法の特性。

根気と常に二人三脚、集中力も必須です。



制作紹介動画QR



写真1 制作工程／
アートナイフで土台に切り込みを入れる



写真2 制作工程／
切り込みに沿って鉄筆で溝を広げる



写真3 制作工程／
自作の金ヘラで絹裂を押し込む

《この画法を思いついたきっかけ》

嵯峨美術短期大学のビジュアルデザインコースでGデザインを学び、在学中は大学近くの京都映画でCM絵コンテのバイトにいそしみ、卒業後は産通名古屋支社で約5年間Gデザイナーをしていました。

代理店では呉服店、和菓子店、酒造メーカーなど和のクライアントを担当することが多く、その一つに節句人形組合があり仕事を通して絹彩画誕生のヒントとなる木目込み人形と出会いました。



写真4
木目込み人形の元となった加茂人形(江戸中期)

もともとイラストレーター志望であったため、この木目込みの伝統技法を人形ではなくイラストレーションの一つの技法として応用できないかと思いつき、代理店を辞め試行錯誤、〈発泡スチロールを成形した立体キメコミイラスト〉を経て現在の形へと落ち着きました。

立体から平面作品として展開するきっかけになったのはデザイナー時代に折に触れ使っていたスチレンボードの存在。発泡スチロールに似た素材で平面作品ができる絶好の画材があることに気づいた瞬間の高揚感は忘れられません。

初期の作品は使用する生地も絹だけではなく木綿や化繊、ニット、麻、ウール、果ては食品を入れるネットや里芋やトウモロコシの皮まで…様々な素材をキメ込み試してみましたが、やがて一番扱い易かった正絹に落ち着くこととなります。



写真5 草創期の作品。
素材を色々試していました。
本物の里芋の皮をキメ込んでいます。

ある程度作品が溜まったところで浅葉克己氏に見ていただく機会があり、祇園の老舗の店先を描いた作品が氏の目に留まり「この線で行くといいね」とアドバイスを頂きました。

以降30余年、風景画家として日本各地を描き続けることになるのですが、もし浅葉さんが里芋を描いた作品に関心を寄せてくださっていたら、今ごろは食べものばかり描く作家になっていたかもしれませんね。

《イラストレーターからアーティストへ》

転身した、というよりも制作に時間が掛かり広告業界のペースには合わずイラストレーターとして通用しなかったのが主な理由です。クライアントワークはこのころから現在に至るまで納期にゆとりがある場合を除き、ほとんど描き溜めた作品の中から企画の趣旨に合った作品をチョイスして使っていただいています。



写真6 クライアントワーク／ニチハカレンダー(2017)



写真7 クライアントワーク／日立カレンダー(2021)

毎年百貨店で個展を開くようになると、制作時間のかかる風景画だけでは展示数が足りず、それ以外のモチーフも描きスペースを埋めていました。

ここ10年は伊藤美藝社製版所様(名古屋市)ご依頼のカレンダー用の風景画を6点と、干支画とたまに草花をそれぞれ3~4点、年間10数点を制作、そんなペースで活動しています。

《モチーフとなる風景との出会い》

昨今はweb上で世界中の風景をリアルに見ることができるようになりましたが、クライアントから資料提供され描く対象を限定される場合を除き、必ず現地へ足を運びます。行ったことのない場所は描くことができません。造形だけではなくその場で感じた光や風、空気のおい、湿度…五感で得た感覚を制作する上で最も大切にしたいと考えています。

訪れただけで作品にしていけない場所もたくさんあります。

旅先では交通機関以外の下調べはせず勘に任せて歩き回ります。事前に得た情報を確認に行くような旅をするのはつまらないことですし幸い方角には強いのでスマホの電池が切れても迷って戻れなくなることはありません。

以前は現場に留まりスケッチしていましたが今は気掛かった所を見つけると動画を撮り、帰宅後にモニターを見ながら止めたり拡大したりしながらスケッチし、それを元に下絵を起こしています。



写真8
丸善日本橋店にて個展をワークショップ



写真9
創画30年記念展／名鉄百貨店美術画廊



写真10 作品「梅花藻ゆれる湧玉池」富士本宮浅間大社

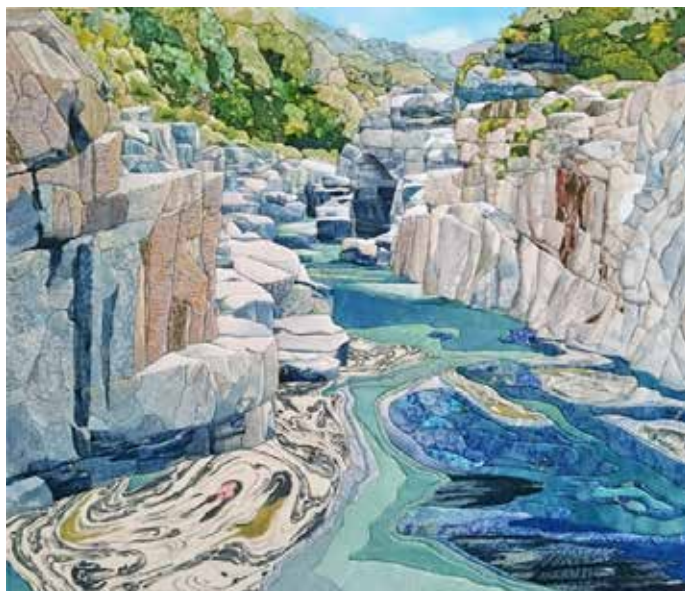


写真11 作品「マーブル模様のきらめき」寝覚の床

《絹彩画の今後》

2016年に在インド大使館の招聘を受け、デリー近郊ハリアナ州で開かれたスラージュクンド国際工芸祭に日本人作家数名と参加しました。19日間の滞在中、展示の傍ら実演とプチレッスンを行いました。日本の着物へのあこがれと技法の珍しさから連日大盛況で、最終日には知事と環境大臣から美術部門で最高美術作家賞を戴き外国の方にも受け入れられる技法であるとの自信を持ちました。トロフィーには「黒ダイヤ賞」と刻まれていました。黒ダイヤはインドでは「悪魔もうらやむ才能」の意味を含んでいるそうです。それはともかく、海外、特に欧米での展開は積年の夢、そろそろ叶えたいものです。どなたか絹彩画にお力を！



写真12 国際交流／
ハリアナ州国際工芸祭にて展示と実演とプチワーク
(インド大使館招聘事業)



写真13 国際交流／日本学校表敬訪問(デリー郊外)

32年前に一人で始めたこの技法。還暦を意識する歳になり技法の先々について思うようになりました。少し前までは何らかの形で継承させていけたら、と漠然と思っていたのですが、今は私とともに消え去るのも悪くないなと考えるようになっていきます。そこに固執するエネルギーを制作に充てようと。もちろん意欲的な後継者が現れたら頼もしいことですが、そうなったとしてもせいぜい半世紀技法の寿命が延びる程度でしょう。宇宙時間に比べれば、はかないことこの上ありません。

意外に思われるのですが技法自体にそもそも固執は薄いのです。

「技法ありきの作家でありたくない」というのは創始以来一貫した思いです。

《作家としての展望》

ここ数年、古い街並や街道を描いた具象作品から心象風景に近い作品へと比重が変化してきています。川の流れや、空、海など、かたちのないものを、感性を頼りに描くことは、終わりのない世界へ踏み出すことであり、挑戦です。ただ、現実には「絹彩画＝日本の古い街並み」のイメージを愛して下さるファンも多く、実際企業カレンダーの依頼は旧来の絹彩画作品が多く採用されていますので一足飛びには、進められません。今は過渡期といえるのですが現状に満足せず、自分の可能性を引き出すのは結局自分自身でしかないといひそかに期しています。

さらに、ゆくゆくは大好きな花をモチーフの中心にと思っています。花の造形美を見つけ出し、イメージを膨らませて描きたいと考え、すでに「絹彩華(きぬさいが)」と名付けることを決めています。年齢を重ねるにつれ取材ありきの創作活動は体力的に難しくなることが予想され、部屋のなかだけで描けるものを、との考えです。生涯画家であり続けたいと思っています。



写真14
国際交流／韓国文化会院にて文化交流展参加(韓国大使館主催)



写真15
創画30年記念作品集
(東海東京証券日本橋ギャラリーにて)

前野 節

CDA会員・JAGDA会員・朝日カルチャーセンター講師・絹彩画
スタジオ及び教室主宰
1961 名古屋市生まれ
1981 嵯峨美術短期大学卒業
2015 京都造形芸術大学卒業
1988 絹彩画創始
1993 初個展 ワコール銀座アートスペース
1995 伊勢丹新宿本店ファインアートギャラリー
以降2018年まで毎年各地の百貨店を中心に個展活動

出版

1999「絹彩画」日貿出版社
出版記念展／三越日本橋本店特設会場
2018「創画30年記念作品集」刊行
出版記念展／
名鉄百貨店本店美術画廊・東海東京証券日本橋ギャラリー

賞歴

1998・2000 3D Illustrators Award Show(NY) 金賞銀賞銅賞
2007 丸紅カレンダー 日本BtoB広告賞 銅賞
2012 伊藤美藝社製版所カレンダー 第62回全国カレンダー展入賞
2016 スラー・ジュクンド国際工芸祭 美術部門 最高美術作家賞
主なクライアントワーク
企業カレンダー…東京相和銀行・中部電力・豊島・成田山新勝寺・
丸紅・デュボン・ニチハ・ゆうちょ銀行・日立家電
ソニーレコード…村下孝蔵シングルCDカバー他数枚
りそな総研月刊誌表紙2016年2017年 他多数



絹彩画動画



WEB作品